

高等学校国語科における文章表現の授業 — ツールミンモデルの理由づけと裏づけに着目した実践 —

Class of sentence expression in high school Japanese language course — Practice Focusing on Warrant and Backing the Toulmin Model —

青木 雅俊*・田中 拓郎**
Masatoshi AOKI, Takuo TANAKA

要旨

本稿は、ツールミンモデルの理由づけと裏づけに着目し、定時制高等学校国語科における意見文作成の指導方法の工夫について考察したものである。論理的な文章を読み、本文や資料を引用しながら自分の意見や考えを論述するという言語活動において、経験に固執せずに客観的事実を扱うことができるようにツールミンモデルの理由づけと裏づけを用いることにより、根拠と主張をつなぐ説明の仕方に改善が見られるか、その有効性を検証した。その結果、根拠と主張をつなぐ説明の仕方に改善が見られてある程度の論理性は獲得されたが、ロジックだけが過剰に意識されて意見文の文章としての構成や展開を意識できなかつたという課題が残った。

キーワード：ツールミンモデル, 理由づけ, 裏づけ

1. 問題の所在と実践の目的

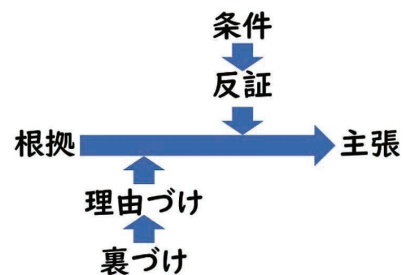
(1) 問題の所在

これまでの自身の実践を振り返ると、文章表現の授業に抵抗を感じる生徒に対してまずは型を与えることが一つの対応策と考え、三角ロジックを用いた意見文の作成を言語活動として行ったことがある。その際、根拠と主張をつなぐ理由の扱いがうまくできず、課題を残すこととなった。意見文の理由に自身の経験を書く者が多く、経験に固執するために話題がそれたり文脈から外れたり、整合性が失われた意見文ばかりになってしまい、論理性を獲得することができなかった。

そこで本実践では、論理性の高い意見文の作成を目指し、ツールミンモデルを用いることとした。とりわけ、経験に固執せずに客観的事実を扱うことができるように理由づけと裏づけに着目し、指導の工夫を探ることとした。

(2) ツールミンモデルについて

ツールミンモデルとは、イギリスの科学哲学者スティーヴン・ツールミンによって提唱された議論モデルであり、主張、根拠、理由づけ、裏づけ、反証、条件の六つの基本要素の使用を提案している。六つの基本要素は以下の図でその関係性が説明されている。



* 青森県立弘前工業高等学校 Aomori Prefectural Hirosaki Technical High School

** 弘前大学教育学部国語教育講座 Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

(3) 実践の目的

ツールミンモデルを文章表現の授業に用いた先行実践について、理由づけと裏づけをどのように扱っているのかを検討する。先行実践一覧は以下の通りとなる。

1	所沢市立教育センター 小・中学校国語研究部	思考力・判断力・表現力の育成を図る指導法の工夫と検証 ～ツールミン・モデルを利用した意見文を書くことを通して～
2	横岡洋子 (竹原市立賀茂川中学校)	根拠を明確にして自分の考えを書く力を高める中学校国語科学習指導の工夫 —「理由付け」の吟味と習得・活用を図る単元モデルの作成を通して—
3	丸橋慶子 (広島市立宇品中学校)	中学校国語科第1学年において根拠と主張のつながりを適切に結び付けて書く力を高めるための指導の工夫 —ツールミンモデルを段階的に用いたワークシートの活用を通して—
4	重田和希 (群馬県立万場高等学校)	高等学校国語科における論理的思考力の育成 —ツールミンモデルの裏付け（B）に着目した実践開発—

先行実践1では、理由づけを扱っているものの裏づけについては扱われていない。報告のなかで「ツールミンモデルとは、『主張』に関連する『事実』を『理由づけ』で正当化するという、『主張・事実・理由づけ』の3つの要素を組み合わせた論証モデルである。」とあることから、ツールミンモデル自体を井上尚美の案で採用しているのか、実践の対象が小学校第5学年であるという発達段階を考慮したうえのものなのかは報告から読み取ることはできない。

先行実践2では、先行実践1と同様に理由づけを扱っているものの裏づけについては扱われていない。しかし先行実践1と違い、ツールミンモデルの6要素について明記しており、井上や鶴田の案を引用しつつ、理由づけの扱いの難しさに触れている。また、実践の対象が中学校第3学年であるという発達段階を考慮したうえのものなのかは報告から読み取ることはできない。

先行実践3では、理由づけと裏づけの両方を扱っている。ツールミンモデルの6要素について明記しており、難波の案を引用しつつ、「中学校第1学年の授業で用いるため」と述べながら理由づけと裏づけを扱っている。つまり、発達段階を考慮したうえで理由づけと裏づけの両方を扱っていることがわかる。

先行実践4では、理由づけと裏づけの両方を扱っている。報告内で、「裏付け（B）は高等学校という発達段階において指導可能なのか」と述べており、成果として「高校生でも介入指導をすることで裏付けを書けるようになる」と結論づけている。つまり、発達段階を考慮した結果、高校生段階で裏づけを扱うことは可能だと判断していることがわかる。

以上のことから、理由づけと裏づけの扱いには以下の傾向が見られる。

- 実践を行う上で参考とした研究者の論の違いで、理由づけと裏づけの扱いが異なること。
- 実践の対象となる児童生徒の発達段階によって、理由づけと裏づけの扱いが異なること。

そこで本実践では、高校生という発達段階では裏づけの指導は可能だという先行実践4を参考に、理由づけと裏づけを扱った意見文作成の授業を実践する。

2. 実践の概要

(1) 単元指導評価計画

本実践は、定時制高等学校4年次5名に対して、全5時間の単元として計画した。単元指導評価計画は以下の通りである。

単元名 社会に対する意見を自分の経験から導き出して書こう（5時間）

【本単元における言語活動と教材】

言語活動：論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する。

（関連：〔思考力、判断力、表現力〕書くこと（2）ア）

教材：社会に対する意見文を書く（第一学習社「高等学校 新編現代の国語」）

【単元の評価規準】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。(2) ア	①自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えている。 (書くこと (1) ウ) ②読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している。 (書くこと (1) エ)	①意見文を書くことを通して、自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を粘り強く考え、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直すことで、自らの学習を調整しようとしている。

【指導と評価の計画】

次	時	学習活動	評価の観点（具体的評価規準）	評価方法
1	1	○単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ○意見文作成に関する主張と論拠など情報と情報との関係について、ツールミンモデルの理由づけと裏づけを活用して考える。	[知識・技能] ① ・主張と論拠など情報と情報との関係について理解しているかを確認する。	「記述の確認」 練習問題
2	2 ・ 3	○自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考え、構成メモに記述する。	[思考・判断・表現] ① ・自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えているかを分析する。	「記述の分析」 構成メモ
3	4 ・ 5	○構成メモに基づいて、意見文を作成する。 ○読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直して改善に活かす。	[思考・判断・表現] ② ・読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直しているかを分析する。 [主体的に学習に取り組む態度] ① ・自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を粘り強く考えたのかを分析する。	「記述の分析」 意見文

3. 実践の報告

(1) 実践の報告 I

本時の指導案は以下の通りである。

単元名	社会に対する意見を自分の経験から導き出して書こう	本時の位置付け 1時間 / 5時間
本時の目標 主張と論拠など情報と情報との関係について理解している。		
言語活動 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する。		
教材 社会に対する意見文を書く（第一学習社）		
	学習内容・学習活動	評価規準等
授業の展開	○単元の目標や進め方を確認し、学習の見通しをもつ。 ○ツールミンモデルの基本について、理解する。 ○練習問題（適切な根拠）、練習問題（適切な理由づけ）、練習問題（適切な裏づけ）の3種の練習問題に取り組み、ツールミンモデルの理由づけと裏づけとの関係について、理解する。 ○次時の構成メモ作成に、ツールミンモデルの理由づけと裏づけを活用することを意識する。	[知識・技能] ① ・主張と論拠など情報と情報との関係について理解しているかを確認する。
		評価方法 「記述の確認」 練習問題

「努力を要する」状況 (C) と判断されそうな生徒に対する指導の手立て

裏づけは、調査の結果わかったことなどの事実やデータが係わることを補足説明する。

本単元では、最終的に意見文の作成を行うことを予告し、その際に活用するツールミンモデルの基本事項についてまずは本時で説明した。主張、根拠、理由づけ、裏づけ、反証、条件の六つの基本要素について説明するなかで、今回は反証と条件をのぞくこと、これまで扱ってきた三角ロジックの理由に該当する理由づけと裏づけが重要であると念を押した。

理由づけと裏づけとの関係を把握させるため、「練習問題 (適切な根拠)」(図1)、「練習問題 (適切な理由づけ)」(図2)、「練習問題 (適切な裏づけ)」(図3)の3種の練習問題を実施した。ツールミンモデルの要素の一つひとつを考える練習問題を実施することで、主張と論拠など情報と情報との関係の理解が進むと考えたからである。

練習問題はGoogleフォームで作成し、Googleクラスルーム上で適宜配信した。生徒の回答状況を随時確認し、正誤に対する解説からの流れで次の練習問題を配信することができるからである。また、本実践におけるデータ収集にも適していると考えたからだ。

練習問題 (適切な根拠)

16566830@asn.ed.jp アカウントを切り替える

このフォームを送信すると、メールアドレスが記録されます

「eスポーツ部を創るべきだ」という主張に対して、適切な根拠を一つ選びなさい。

- 運動部に対して文化部の数が少ない。
- これからの時代、パソコンを使えない人は生きていけない。
- eスポーツ部ができた他の高校の入試倍率が上がった。

図1 練習問題 (適切な根拠)

練習問題 (適切な理由づけ)

16566830@asn.ed.jp アカウントを切り替える

このフォームを送信すると、メールアドレスが記録されます

「eスポーツ部ができた他の高校の入試倍率が上がった。」という根拠と、「eスポーツ部を創るべきだ」という主張をつなぐ、適切な理由づけを一つ選びなさい。

- 他の高校にはあるのに、うちにはないはず。
- 本校存続のためには入試倍率を上げる必要がある。
- 流行には敏感に、柔軟に対応するべきだ。

図2 練習問題 (適切な理由づけ)

練習問題 (適切な裏づけ)

16566830@asn.ed.jp アカウントを切り替える

このフォームを送信すると、メールアドレスが記録されます

「eスポーツ部ができた他の高校の入試倍率が上がった。」という根拠と、「eスポーツ部を創るべきだ」という主張をつなぐ理由づけとして考えた「本校存続のためには入試倍率を上げる必要がある。」に対する適切な裏づけを一つ選びなさい。

- 近年、入試倍率は常に1倍を切っている。
- 入試倍率が高い方が人気があるように見える。
- eスポーツ部は全国どこでも人気がある。

図3 練習問題 (適切な裏づけ)

図1では「eスポーツ部を創るべきだ」という主張を仮定し、その主張に対する根拠を選択肢として設定した。選択肢は、「運動部に対して文化部の数が少ない。」「これからの時代、パソコンを使えない人は生きていけない。」「eスポーツ部ができた他の高校の入試倍率が上がった。」の三つである。選択肢の設定において、一般論ではなく事実を選択することができるかどうかを観点とした。結果として、5名中3名が正答、2名が「運動部に対して文化部の数が少ない。」という誤答を選択した。このことから、根拠には一般論ではなく事実を用いるべきだという考えは定着しているものの、根拠と主張との明確な関連を意識できていない生徒がいるということになる。

図2では、「eスポーツ部を創るべきだ」という主張と、「eスポーツ部ができた他の高校の入試倍率が上がった。」という根拠とをつなぐ理由づけを選択肢として設定した。選択肢は、「他の高校にはあるのに、うちにはないはず。」「本校存続のためには入試倍率を上げる必要がある。」「流行には敏感に、柔軟に対応するべきだ。」の三つである。選択肢の設定において、根拠と主張とのつながりを捉える論点を正確に掴むことができるかどうかを観点とした。結果として、5名全員が正答を選択したことから、先の練習問題で解説した根拠と主張との明確な関連を意識できていることがわかる。

図3では、「本校存続のためには入試倍率を上げる必要がある。」という理由づけに対する裏づけを選択肢として設定した。選択肢は、「近年、入試倍率は常に1倍を切っている。」「入試倍率が高いと人気があるように見える。」「eスポーツ部は全国どこでも人気がある。」

ある。」の三つである。選択肢の設定において、理由の論点を正確に掴むことができるかどうか、一般論ではなく事実を選択することができるかどうかを観点とした。結果として、5名全員が正答を選択したことから、理由づけを支える論点を正確に捉え、事実を用いるという考えが定着できたことがわかる。

以上3種の練習問題の結果から、主張と論拠など情報と情報との関係について理解したと判断することができる。

(2) 実践の報告Ⅱ

本時の指導案は以下の通りである。

単元名	社会に対する意見を自分の経験から導き出して書こう	本時の位置付け 2, 3時間 / 5時間	
本時の目標 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えている。			
言語活動 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する。 教材 社会に対する意見文を書く（第一学習社）			
	学習内容・学習活動	評価規準等	評価方法
授業の展開	<ul style="list-style-type: none"> ○気になるニュースの新聞記事を選び出す。 ○選んだニュースの事柄や、それに対する自分の考えが的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考え、構成メモに記述する。 ○構成メモを共有し、自身の考えの改善に活かす。 	[思考・判断・表現] ① ・自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えているかを分析する。	「記述の分析」 構成メモ
「努力を要する」状況(C)と判断されそうな生徒に対する指導の手立て 前時の練習問題を活用し、理由づけと裏づけについて再度説明する。			

本時では、ツールミンモデルの主張、根拠、理由づけ、裏づけの図式化を活用した構成メモ（図4）を作成することとした。構成メモはGoogleジャムボードで作成し、Googleクラスルーム上で配信した。それぞれの要素を付箋で作成することにより、修正や移動が容易となり、積極的な推敲が促されると考えたからである。

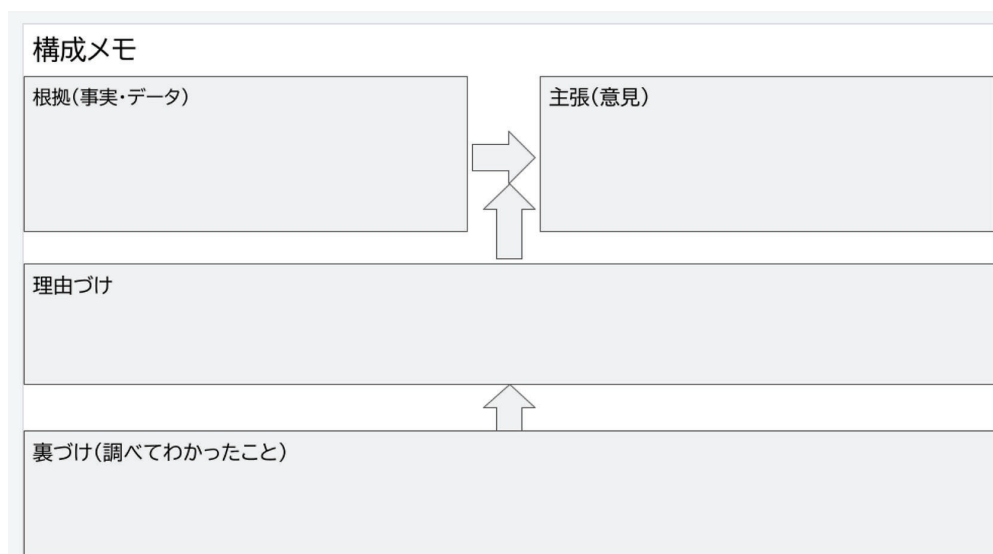


図4 構成メモ

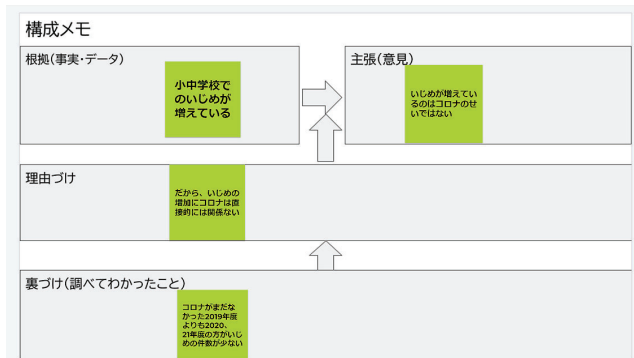


図5 構成メモ(生徒A)

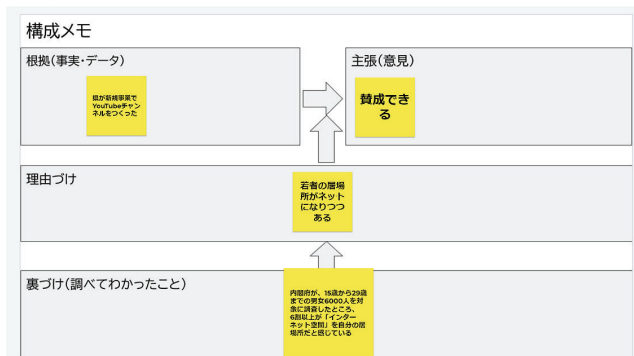


図6 構成メモ(生徒B)

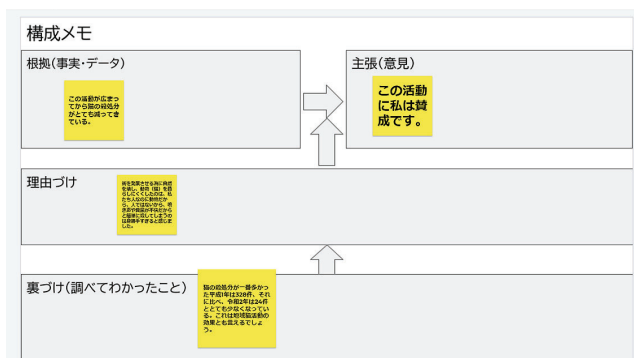


図7 構成メモ(生徒C)

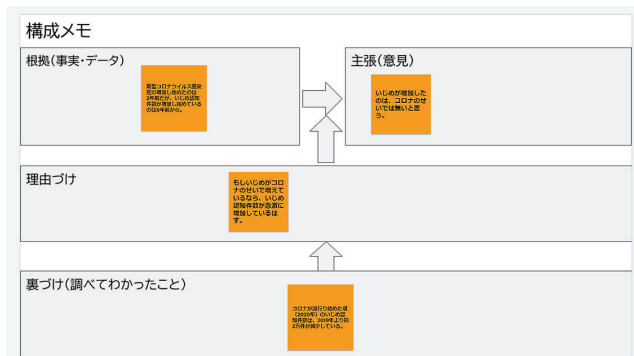


図8 構成メモ(生徒D)

構成メモ(図5)を作成した生徒Aは、新聞記事を読んだ最初の段階で、「いじめや不登校が増えているのはコロナのせいではない。」と断言していた。しかし、その理由付けが主観によるものから抜け出せずに、しばらく苦勞していた。そのため、裏づけは調べてわかったことでも良いのだから、新聞記事以外から裏づけを探してみることを助言したところ、「コロナがまだなかった2019年度よりも2020、21年度の方がいじめの件数が少ない」という裏づけを作成するに至った。出典までは意識できていないようで、次回までの課題となるだろう。

構成メモ(図6)を作成した生徒Bは、スマホゲーム等が大好きな生徒であったため、理由づけが経験則によるものとなった。そこで、生徒Aへの助言と同じようなものをしたところ、「内閣府が、15歳から29歳までの男女6000人を対象に調査したところ、6割以上が『インターネット空間』を自分の居場所だと感じている」という裏づけを作成するに至った。しっかりと出典までが意識されていることがうかがえる。

構成メモ(図7)を作成した生徒Cは、こちらからの助言がほぼない状態で、「猫の殺処分が一番多かった平成1年は328件、それに比べ、令和2年は24件ととても少なくなっている。これは地域猫活動の効果とも言えるでしょう。」という裏づけを作成している。しかし、理由づけが主観的なものから抜けきれないところが課題となる。

構成メモ(図8)を作成した生徒Dは、当初から主張は変わらなかったものの、理由づけを考えることができなかった。そこで、コロナのせいだと仮定したらどのようなことが起こるか考えてみることを助言したところ、「もしいじめがコロナのせいが増えていなら、いじめ認知件数が急激に増加しているはず。」という理由づけに至り、その裏づけを「コロナが流行り始めた頃(2020年)のいじめ認知件数は、2019年より約2万件が減少している。」とした。

以上のことから、各々が根拠の示し方や説明の仕方を考えるという目標を概ね達成することができたと言えるだろう。

(3) 実践の報告Ⅲ

本時の指導案は以下の通りである。

単元名	社会に対する意見を自分の経験から導き出して書こう	本時の位置付け	4, 5時間 / 5時間
本時の目標 読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している。			
言語活動 論理的な文章や実用的な文章を読み、本文や資料を引用しながら、自分の意見や考えを論述する。			
教材 社会に対する意見文を書く（第一学習社）			
	学習内容・学習活動	評価規準等	評価方法
授業の展開	○構成メモに基づいて、意見文を作成する。	[思考・判断・表現] ② ・読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直しているかを分析する。	「記述の分析」 意見文
	○読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直して改善に活かす。	[主体的に学習に取り組む態度] ① ・自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を粘り強く考えたのかを分析する。	「記述の分析」 意見文
「努力を要する」状況（C）と判断されそうな生徒に対する指導の手立て 文章の構成や文末表現など、基本事項の確認をさせる。			

本時では、構成メモに基づいて実際に意見文を作成する。意見文はGoogleドキュメントで作成し、Googleクラスルーム上で配信した。添削機能を活用することにより、修正や助言が容易となり、積極的な推敲が促されると考えたからである。

以下に、生徒Eの意見文を掲載する。

私は地域猫の活動については賛成ではいるが、無理があると考えている。
 なぜなら全ての地域猫や管理をすることは難しいからである。
 地域猫による直接的・具体的被害の中でも糞尿・悪臭問題の割合が多い。
 このデータは環境省のアンケート調査によるものだ。
 だから活動自体には賛成ではいるが無理があると考えている。

図9 意見文（生徒E）

生徒Eの意見文は、ツールミンモデルの要素をそれぞれの段落に機械的に配置しようとした結果と考えられる。しかし、第1段落と第5段落が主張、第2段落が理由づけ、第3段落と第4段落が裏づけであり、根拠が明記されていない。つまり、要素一つひとつがまるで独立しているようであり、それぞれの関連を理解しきれていないということが考えられる。次に、生徒Cと生徒Dの意見文を掲載する。

私は地域猫活動に賛成だ。
 猫が猫らしく、地域の人と一緒に暮らせることは個人的に嬉しい。
 人の勝手に迷惑と感じ、“猫だから”簡単に殺してしまうのはおかしい。
 この活動が広まり、実際に猫の殺処分がととも減った。環境省自然環境局総務課動物愛護管理室のサイトから、全国の犬・猫の殺処分数の推移というグラフによると、最も殺処分が多かった年は平成1年328件、それに比べ令和2年は24件ととても少なくなっている。このデータの対象期間は令和2年4月1日から令和3年3月31日に実施したものである。これは地域猫活動のおかげとも言えるだろう。
 だから私は地域猫活動に賛成だ。この活動がもっと広まり猫たちが幸せと感ずることができる世の中になってほしい。

図10 意見文（生徒C）

生徒Cは、裏づけとなる調べた内容については潤沢に書かれているが、理由づけが弱くなってしまった。構成メモの時点では「街を発展させる為に自然を壊し、動物（猫）を暮らしにくくしたのは、私たち人なのに動物だから、人ではないから、鳴き声や糞尿が不快だからと簡単に殺してしまうのは身勝手すぎると感じました。」とあるのだが、意見文の作成におい

「いじめ増加 コロナで意欲減少か」という新聞記事があった。

だが私は、いじめが増加したのはコロナのせいではないと考える。

もしコロナのせいでいじめが増えているのならば、いじめ認知件数が1年だけで急激に増加しているはずだ。

文部科学省から発表されている、『令和2年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要』では、コロナの感染者が増えてきた2020年のいじめ件数は2019年のいじめ認知件数より約2万件も減少している。そのうえ、国立感染症研究所が2020年8月に発表したデータによると、新型コロナウイルス感染症が増加し始めたのは2年前。だが、日本経済新聞の2021年10月13日に更新されたものを見てみると、いじめ認知件数が増加し始めたのは6年前だということが分かった。

これを踏まえて、いじめが増えたのはコロナのせいでは無いと考える。

図11 意見文(生徒D)

ては必要以上に省略されている。また、生徒E同様に、根拠が明記されていない。

生徒Dも、今回扱ったツールミンモデルの4要素ごとに段落を作成した。第1段落が根拠、第2段落が主張、第3段落が理由づけ、第4段落が裏づけ、第5段落で再度主張を述べている。

生徒Dは第1校の時点で他の生徒全員と同様に、第1段落の根拠となる新聞記事の存在を書いていなかった。この現象の背景について、二つの仮説が考えられる。

仮説1 読み手は授業者であり、新聞記事の存在を知っているという暗黙知からの省略。

仮説2 根拠、理由づけ、裏づけの書き分けを形にすることができず、三角ロジックとして3要素に省略。

仮説1の検証として、根拠となる新聞記事の存在が書かれていなければ、この意見文を読んだ人には唐突に始まった印象を与えるのではないか、という発問を投げかけた。その結果、発問内容に納得はしたものの、生徒Dのようにあからさまな後付けの形で第1段落の根拠が追記された。したがって、仮説1の背景の存在が確認されたことになる。

また、先述のように第1段落が取って付けたようにしか追記されなかったことから、仮説2の背景の存在もうかがえる。

したがって、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特長や課題を捉え直している様子は見られるものの、自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を粘り強く考えたとは言えない結果となってしまった。

4. 成果と課題

(1) 成果

本実践では、ツールミンモデルの理由づけと裏づけに着目し、定時制高等学校国語科における意見文作成の指導方法の工夫について考察した。論理的な文章を読み、本文や資料を引用しながら自分の意見や考えを論述するという言語活動において、経験に固執せずに客観的事実を扱うことができるようにツールミンモデルの理由づけと裏づけを用いることにより、根拠と主張をつなぐ説明の仕方に改善が見られるか、その有効性を検証した。

まずは根拠、理由づけ、裏づけを適切に扱うための練習問題を通すことにより、それぞれの要素に必要な客観性や説得力などを理解してもらい、ツールミンモデルのロジックを理解してもらうことができた。

そこから作成された意見文の構成メモでは、自身の経験に固執していない客観的事実を適切に用いることにより、根拠と主張をつなぐ説明の仕方に改善が見られてある程度の論理性は獲得された。

したがって、意見文作成においてツールミンモデルの理由づけと裏づけは有効だと考えることができる。

(2) 課題

本実践では、構成メモから意見文として作成する際にツールミンモデルの要素を機械的に羅列してしまうという課題が残った。この現象の原因は二つ考えられる。

○学習者にツールミンモデルのロジックだけが過剰に意識され、意見文の文章としての構成や展開を意識することができなかった。

○意見文の論理性を高める必要感を得ることができなかった。

一つ目の原因の対応として、文章の構成や展開を指導する必要がある。つまり、トールミンモデルを思考の型とし、文章の型を別に指導することとなる。その文章の型を、トールミンモデルの要素と連動するように指導することを今後検討する。

二つ目の原因の対応として、論理性を高める必要感を得るためには、論理性の低さを自覚する経験が必要となる。論理性の低さを他者から指摘、評価されるような経験を学習過程に組み込むことを今後検討する。

【参考文献】

- 文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説国語編』東洋館出版社
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2021）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【高等学校 国語】』東洋館出版社
- 鶴田清司（2020）『教科の本質をふまえたコンピテンシー・ベースの国語科授業づくり』明治図書出版
- 名古屋大学教育学部附属中学校・高等学校国語科+千葉軒士（2021）『「書くこと」の授業をつくる—中・高・大で教える『はじめよう、ロジカル・ライティング』』ひつじ書房